

りに高くなります。ポーランドではドレスだけ借りて、小物をネットかお店で買い揃えることが多いです。面倒でも、友達と一緒にに行けば楽しくショッピングできるし、買った小物を記念として長く楽しめます。

まとめると、衣装探しに関してはポーランドのほうがレグワークを要するが安く上がり、衣装も長時

間着るので日本のドレスと比べると動きやすく疲れません。人生に一回だけでもお姫様気分になりたいのなら日本のドレスの魅力がわかります。価格の安さを求めることはできませんが、一カ所で効率的に衣装を揃えられるのは楽ですね。

NHK《ラジオ深夜便》より

イギリス文学に貢献したポーランド人 コンラッド

岡崎 恒夫



皆さんはジョーゼフ・コンラッドという作家をご存じでしょうか。文学事典では英国の作家として紹介されています。特に海洋文学を得意とし、英文学史の中でもその分野では傑出した作家です。

彼の『闇の奥』(1899)という作品に注目したフランス・ Coppola監督が映画化して世界的な評判を得た『地獄の黙示録』(1979)という映画をご覧になった方も多いでしょう。極度の孤独と寂寥はいかに人間性を荒廃させるかという主題の権化を見事に演じたマーロン・ブランドを覚えていらっしゃる方もあると思います。映画の舞台はベトナムになっていますが、本ではコンゴでの出来事です。



今日はその作家ジョーゼフ・コンラッド(1857-1924)をご紹介します。彼は正にポーランド生まれのポーランド人で、最後までポーランド人であることに誇りを持ち、遺言で、カンタベリー墓地にある墓碑にはポーランド名がポーランド語で記されています。本名はテオドル・ユゼフ・コンラット・コジェニョフスキ、外国人に妙な発音で呼ばれないために苗字以外の名前を二つとって英国名としたのです。

ではどうしてポーランド人のコンラッドが英語で書いた文学が、英国人がこれ以上に豊かな表現を持つ英語はないと言い切り、英語(いわば国語)の教科書にもっとも重要な模範英語として採り入れられているのでしょうか。その謎を解くには彼の生い立ちから見えていくほかありません。

コンラッドは 1857 年(日本ではペリー提督来航の頃)にポーランドの没落した貴族(シュラフタ)の息子として生まれました。父親はロシア占領下でポーランド独立運動に参加し息子が 5 歳のときに流刑になり、一家も父親を追って北ロシア・ヴォログダに移住しました。そこで母親が結核で亡くなり、4年後に父親も死亡したため、彼はクラクフのおじさんに引き取られました。

寂しさを紛らわせるため、文学研究者だった父親の残した蔵書を片っ端から読破したコンラッド少年は海洋文学に目覚め、海にあこがれて 1873 年 16 歳で故国を脱出しフランス船の船員になりました。

5 年間フランス船で世界中を航海したあと、1878 年(日本の西南戦争のころ)イギリス船に移り、船員との会話で初めて英語を学んだのです。その間世界各地を航海して見たり体験したりしたことが、後の彼の作品の素地となりました。没落したとはいえ当時のポーランド貴族の間ではフランス語、ドイツ語が公に使われ、北ロシアではロシア語を習得したことが彼の文学に幅広さと深さを植えつけました。

こうして大人になってから英語を学び、38 歳(1895)でやっと作家デビューを果たしたのです。すでに数ヶ国語をものにしていたコンラッドは、よほど英語が性に合ったらしく「もし英語で書いていなかったら、私は何も書いていなかっただろう」と言っています。英国船上で、後のノーベル賞作家ジョン・ゴールズワージー(1867-1933)や、『宝島』(1883)の作者ルイス・スティーヴンソン(1850-94)と知り合い、彼らとの付き合いは生涯続きました。

コンラッドゆかりの場所としては、ワルシャワの目抜き通り Nowy Świat 47 に旧居が残っています(写真上、この建物のオーナーはショパンの妹で、ショパンの父親がここで亡くなりました)。またザコパネには彼が晩年滞在したヴィッラ・コンスタンティヌスが残っています(写真下)。

(おかげさ つねお)

photo 上 Mateusz Opasiński
下 Maciej Szczepańczyk

